『ドント・ルック・アップ』

監督：アダム・マッケイ

出演：レオナルド・ディカプリオ、ジェニファー・ローレンス、
メリル・ストリープ、ケイト・ブランシェット ほか

2021年／アメリカ／143分

公式サイト

Netflix 映画『ドント・ルック・アップ』
独占配信中

社会を旅する
シネマ

きっと もっと 近くなる
きっと もっと 知りたくなる

危機に対処できない社会の軌道修正はできるのか

アーヤ藍

危機に実際に直面しないと人は変わらない、と言われる。しかし危機に直面してもなお、私たちは変われないかもしれない。

物語は天文学部博士課程のケイトが、新しい彗星を発見したところから始まる。教授のミンディ博士と大喜びしたのも束の間。その彗星は地球へ向かっており、約6カ月後には衝突することがわかった。しかも、エベレスト級のサイズ。衝突したら地球は壊滅状態だ。

急いで関係機関に伝え、アメリカ大統領に面会できることになったふたり。しかし、大統領の反応は「静観し、精査する」。近日の中間選挙に悪影響を及ぼしたくないからだ。「極秘だ」と口止めされるも、彼らはメディアへリークすることに。だが「軽くおもしろく」をモットーにした番組で、彼らの言葉はまともに受け取られない。「元妻の家も破壊されますかね？」とジョークを飛ばされる始末。怒りが頂点に達したケイトは泣き叫んで訴えかける。その姿はヒステリーでクレイジーな女性とされ、ひどい加工をされた動画や画像がネット上にあふれることに。一方の博士は「セクシー預言者」「抱かれたい天文学者」などともてはやされ、肝心の彗星のニュースは天気や交通情報以下の関心しかもたれなかった。

その後、ゴシップネタで危うい立場に置かれた大統領が、自らの立場を有利にするために彗星衝突の危機を発表。世界はようやく目を向けるようになる。しかし、彗星の軌道を変える作戦の実行を目前に、今度は世界的大富豪のIT企業社長が「彗星には140兆ドル相当の資源がある」と言い出す……。

本作の予告編は「実話に基づくかもしれない」と謳うが、その言葉どおり、細部に渡って「あるある！」がぎっしり詰まっている。だからこそ、コメディ具合に笑いながらも空恐ろしくなる。どうしようもなさにあふれた社会の「軌道修正」をどこから行えばいいのかと途方にくれるからだ。

現実社会と重なってみえる本作に気づかされることは多くあるが、ひとつ挙げるなら「自信の危うさ」だ。テレビ局の人たちは感情的なケイトに「メディア訓練が必要だ」と素人をかわいそうがるように言い、最先端の技術をもつIT企業社長は末端研究者のミンディ博士をバカにする。博士は博士で、SNSのフォロワー数の増加に酔って「真実を周知しなければ」と躍起になる。そのSNS上にはハッシュタグのグルーピングと分断が次々に生じ、自分を世界の中心のように語る人々があふれる。誰もが自分の正しさを信じて疑わず、どこか周囲を見下している。全員の不完全さやもろさ、滑稽さも露呈していくのだが……。

では、私はこの作品の中の誰だろう？私もひとりの不完全で滑稽な存在なのだと本作を観て思う。映画を通じて自分と社会を客観的に見つめることが、来るべき危機に備える一歩になるかもしれない。

あーやあい：映画探検家。1990年生。慶應義塾大学卒。在学中に訪れたシリアが帰国直後に内戦状態になったことをきっかけに、社会問題をテーマにした映画の配給宣伝を行うユナイテッドピープル（株）に入社。同社取締役副社長も務める。2018年独立、映画イベントの企画運営や記事執筆等を行う。